「平和と人権」市民ネットワーク情報 No.23-3(通算 94 号)
事務局発行(℡ 0557-45-1182) http://peaceito.moo.jp 2023.3/3

3月21日(火・祝) 午後2時～ ひぐらし会館
松元ヒロ・ソロライブ in 伊東

へお出かけください

ヒロさんからのメッセージ

「９条改悪 NO！伊東市民アクション、「平和と人権」市民ネットワークの皆さま、こんにちは！

この度は『松元ヒロ・ソロライブ』を呼んでくださり、ありがとうございます。私は『テレビで会えない芸人』と呼ばれております。何故かというと、政治の話を、いや、政府の悪口を言います。

だって、アベ、スガ、キシダ、表紙は変わっても中身は変わらない。おかしな政治を続けていますよね。怒ってばかりでは、疲れます。笑い飛ばしましょう、この日本を。笑うと元気が出てきます。当日は政治だけではなく、「本」の話、「映画」の話、そして、「憲法の話」を聞いていただきます。一緒に笑って元気になりましょう！ 松元ヒロ

◆前売り券（1,500 円）の販売店

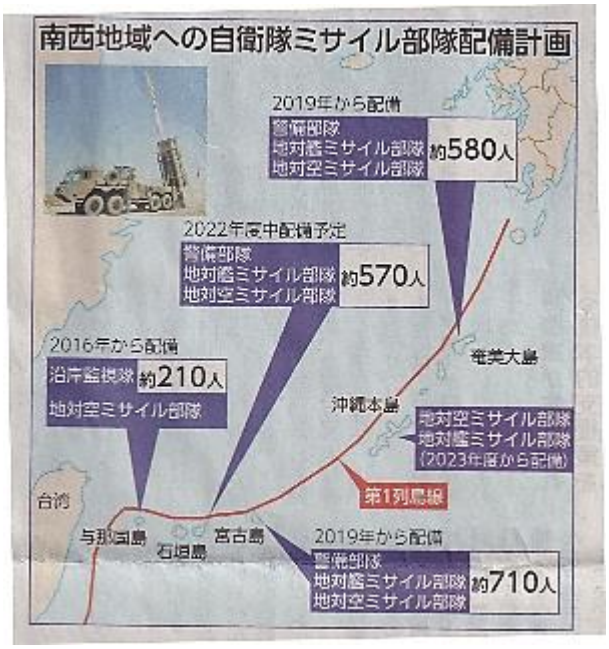
文泉堂さん（銀座元町）℡37-2970
岩上書店さん（八幡野）℡53-0051

◆書店に行けない人➔ チケットの取り置き、三好（☎45－1182）へ

大軍拡反対の署名を広げよう

◆平和への逆流

岸田政権は、敵基地を攻撃できる長射程のミサイルを何千発も保有するために、27 年度までの 5 年間に軍事費を 43 兆円に増やすことを閣議決定しました。憲法を蹂躙し、専守防衛から逸脱し、財政規律を無視する”歴史的な”暴政に踏み出しました。国会での野党の追及には、「防衛秘密」を盾に、保有するミサイルの数も、攻撃目標も明らかにしません。軍事価値が民主主義を棄損し、人権を危うくする事態が始まっています。私たちは、長く平和の恩恵にあずかってきました。今、その逆流に抗して声をあげるのは戦後民主主義の時代を生きた私たちの務めではないでしょうか。



↑2/8「赤旗」より

←1/28「赤旗」より

◆一人でも多くの声を

通信 2 月号に同封(添付)して皆さんに、「大軍拡、大増税に反対する請願署名」を送り、伊東市職宛に返送をお願いしました。2 月 28 日現在で市職に届いた**署名数は 13 名の方から計 124 筆**でした。ご協力いただいた方々には感謝申し上げます。「ネットワーク」と「アクション」に入っている方は、ざっと 130 余名。**一人一筆でも合わせれば 130 筆超**になります。まだ、送っていない方は、ご自身や身内の方だけでも結構ですので、署名のうえ下記まで郵送をお願いします。

〒414-0046　伊東市大原 2-1-1　伊東市職員労働組合

全国の集約は第一次が 2 月末、第二次が 3 月末、と聞いています。今からでも十分間に合います。一人でも多くの声を届けましょう

新婦人伊東支部では２/１８河津桜祭りの会場で署名活動を行い、１１人で３１筆を得ました！

（新婦人新聞 2/11 号）

2/6、湯ノ花 宣伝行動

２月６日は恒例の「６の日行動」日です。２時前に湯ノ花通に集まりました。平和委員会と原水協のメンバーに加えて、今日は新婦人から何人も参加し、総勢１１名で賑やかに宣伝活動をしました。伊藤廣光さんがマイクで核兵器の危険性を訴え、核兵器禁止条約を批准しない日本政府を批判しました。「核抑止力で平和が保たれるなら、世界のすべての国が核をもてば世界は平和になるのか」と突っ込みを入れました。署名を呼び掛ける人、宣伝ビラを配る人、シール投票をしている人もいました。

通行人は多くはありませんでしたが、その割にビラを受け取る人、署名する人は多かったように思います。私は「大軍拡・大増税反対署名」を行って５筆。同じ署名を取ったＡさんは４筆。核兵器禁止条約批准の署名数はさらに多かったはずです。親切にもチョコレートを差し入れてくれた人がいました。終わってから、署名の集約もそこそこに、皆さん、食べる方に集中していました。天気も良く無事に終了して良かったです。（文責　三好）

2/19 、「19 日行動」

午前中から雨・風とも強く、外でのスタンディングは中止しました。が、ただ中止するのでは警察署に支払った 2,300 円が無駄金になる。伊藤さんと相談して観光会館の会議室で「トーク＆トーク」集会を持つことにしました。連絡がスムースに行くか心配でしたが平和委員会の人たちを中心に 20 名近い人が集まりました。初めに持田さんがスピーチ原稿を読み上げました。安保３文書によって「専守防衛」が崩され９条は空洞化した。かつて日本が侵略した中国や朝鮮に脅威を与えてはならない。力による抑止戦略は軍拡競争に陥るだけ、緊張緩和に努めるべきだ、と訴えました。三好は「戦争を準備するのではなく、平和を準備しろ」というけど、「平和を準備する」とはどんなことをすることなのか。現代と過去を通じる人と人の交流を積み上げることが「平和を準備する」ことにつながるのではないか、とやや抽象的な話をしました。大川好子さんは、昨日新婦人の人たちで河津桜祭りに出かけ、署名活動をしたことを話されました。11 名で 31 筆を得たこと、福島から来た人は岸田政権の原発政策に怒りの声をあげていたと紹介しました。そして、署名の「軍拡」といった言葉は相手に通じにくい。もっとわかりやすい言葉を工夫した方が良い、と感想を語っていました。最後に重岡さんが「明るい伊東」を配りながら、市民病院の不当な処置に裁判で闘った石山医師と支援者の活動を話され、その闘いがあって市議会と市民病院の懇談会が持たれることになったことを報告しました。以上四名の話に対して出席者からも発言があり、時間があっという間に過ぎました。スタンディングの時の話よりも、閉じた室内での話の方が集中して聴けるという感想を持ちました。第一部の「トーク＆トーク」の様子は以上です。　（文責　三好）

2/19、学習講演会

室内「トーク集会」に引き続いて、15:00～原田政信さんを講師に招き学習講演会を開きました。テーマは「安保三文書に見る防衛政策転換の意味」です。原田さんは安保３文書によって『専守防衛』政策を転換したことの背景に、米軍の対中戦略があることを指摘します。一つは米軍の「統統合防空ミサイル防衛構想」に自衛隊が組み入れられていること。同構想では、敵のミサイルを迎撃するだけでなく、発射前に破壊する先制攻撃をも選択肢とし、攻撃目標として指揮統制機能含むことを明示しています。第二に、米インド太平洋軍の IAMD 構想 2028 は米軍と同盟軍との「シームレスな融合」に基づく共同訓練、共同作戦を謳っています。こうして、米戦略に沿ってこれと整合するように安保３文書が改定されたことが明らかになります。続いて原田さんは安保３文書を先取りして南西諸島のミサイル基地化と大規模な日米統合演習が実施されていることに注意を促します。司令部の地下化、民間空港や港湾の使用、住民の避難訓練など、官民挙げての臨戦態勢が作られつつある、と言います。また、米シンクタンクは台湾有事に米軍が武力介入したとき、嘉手納から三沢まで、米軍基地が中国軍の攻撃を受け、何千という米兵が犠牲となるという試算を公表しています。こうした状況を踏まえて、私たちが何をしたらいいのか、という問題提起をされて講演を終えました。

質疑・応答では様々な意見が出されました。いくつか紹介します。

- 日本が戦争に巻き込まれないためにはどうしたらいいか。
- 台湾有事に米軍が日本の基地から出撃すれば、日本は中国から攻撃され戦争の当事国となる。
- こういう危機的な状況にもかかわらず、マスコミを含め反対運動が盛り上がらないのはなぜか。
- 運動する側の弱さもある、高齢化もあるし、署名への組織的な取り組みも必要だ。
- 平和運動の裾野を広げる上で、文化活動は重要。そこでの人のつながりを大事にする。

終了予定時刻を越えて議論は続きました。第四会議室はいつのまにか満席となり２４～５名の方が参加して無事に終えました。

（文責　三好）

残業拒否で解雇―田中秀幸さん 33 年の闘い、その 3(完)―

田中秀幸さんが東京都小平市の日立製作所武蔵工場に就職したのは 1960 年。トランジスター製造工として働いた。入社して 7 年目のある日、田中さんは上司から急に残業を命じられた。先約があった田中さんはこの日の残業を断わった。会社は就業規則違反を理由に 10 日間の出勤停止を命じた。さらに、反省の情が見られないとして解雇した。田中さんは残業には本人の同意が必要であり不当な解雇であると主張し、解雇撤回を求めて提訴。ここから、世界の日立を相手に、田中さんの 33 年に及ぶ不撓不屈の闘いが始まった。

第３部　法廷外の闘い

三好　最高裁の判決は 1991 年に出たんだけど、2000 年に和解が成立したとあるのはどういうことですか。

田中　法定外の闘いですね。参議院議員の緒方さん（警察の電話盗聴事件）に誘われて、一緒に国連人権委員会に行き訴えた。人権委員会には４年間も続けた。最初行ったときは、フランス人の弁護士に取り上げてもらったわけ。そしたら当日の夕食時の国営テレビに３分半も放映され同行者は大騒ぎ。翌日のビラ配布で多くの人からテレビを見たと。こうして日立の悪行が世界に広がった。国際社会から孤立させるもう一つは田中支援の国際支持署名。アメリカにも一週間訴えに行った。ネットで全世界に署名協力を訴えた。そしたら驚いたね。トリニダード・トバコとかバルバロスとか、47 ヶ国から１千数百通の署名が届いた。世界から孤立させて解決に追い込む作戦はまさに的中した。すると議員会館の緒方さんの事務所に日立本社の人が会いに来て、「もう手を打ちたい、どうやったら解決できますか」と。遂に巨大な山が動いた。国際社会に訴えたら日立がギブアップした。男女差別是正争議をいっぺんにまとめて解決したいと日立が打診してきた。日立は白旗を挙げてきた。2000 年９月、私を含めた７争議７６名の一括全面解決した。調印の後で日立はこう言った。「わが社が責められて困ったことが３つある。まず一番に困ったのは国際社会への宣伝だ」と言った。世界の日立が陰に隠れてこんなひどいことをやっています、と宣伝されたからね。

会社が２つ目に困ったのは大学生への宣伝行動。私はいつも「敵の弱所はどこか」と考えていたわけ。世界の日立と同時に、日本のリーディングカンパニーでしょ。優秀な学生が欲しいわけ。週刊誌を見ると今年の日立はどこどこ大学から何人、と出るわけ。それに掲載されている大学の門前でビラを配るわけ。会社は当て込んだ学生が組織できなくなる。私たちがまいたビラには「奪われたアフターファイブを取り戻そう」と。日立の悪行をいくつも列挙。ある時それを見た北大の女学生から電話が来て、「お茶の水の本社に行くことが決まっているんですけど、これ本当のことなんですか」と言ってくるわけ。説明したら、「じゃー、私止めます」と。日立は困っちゃった。そこで弁解の文書を朝日、読売、毎日の見開き２ページを全部使って、大きな見出しで「アフターファイブは趣味におぼれよう」って掲載した。夕刊ゲンダイは、日立はその掲載に４億円を使ったと報じた。もの凄い金を使って、バラ色の広告を書いたわけだ。

三好　ダメージを受けたわけだ、日立は裁判で勝っても。

田中　会社は異例の長時間残業抑制の通達を出した。その背景の二つ目に「日立は仕事がキツイということが学生の間に喧伝されており、採用政策上大きなマイナスになっている」「退職するものが出ており、その予備軍はさらに多い」として、これからの残業を抑制する、と。私たちのビラで労務政策が変わってしまったわけ。

三好　すごいね。一人の闘いで。

田中　７年間、あっちこっちの労働組合、県労連やいろんな団体に行って「大学に行ってビラをまいてくれ」と頼んだ。効果てきめん。日立の労働者と一緒に筑波大学の学食の前の大勢の列でビラを配ると、「このビラ本当?」と問われる。「私たちみんな日立製作所から来たんだよ」と身分証明書をだす。「あぁー本当のことですか、これはダメだ、ダメだ」と学生。これはヒットだったね。

もう一つ、会社が困った３つ目は、企業の聖域に乗り込んでいったこと。

三好　どこですか。

田中　株主総会。百万円の株券で出席できる。あっちこっちから株券を組織して乗り込んだ。最初５人で出席。第一回目の総会には 500 人くらい出席で、発言したのは私一人。不当解雇の撤回を追及した。たった 15、6 分でシャンシャンで終わってしまう。議長は社長がやる。翌年は３人が発言。年々発言者を組織し、最後に１０名くらいが賃金差別をなくせとか発言する。１０年も続けると終了時間は 12 時 15 分で所要２時間余り。会社は困っちゃった。最初のころは総会屋が入っていて、「テメェ―、この野郎、組合大会じゃねんだぞー」「黙れ、座れ」なんて言われるわけ。終わったあと取り囲まれ「テメェ―生意気だ」と脅かされるわけね。四年くらい後に総会屋は消えたね。やがて野党の総会屋が会社をやっつける。私たちの発言に「今日は良かったぞ」なんてほめられる。おもしろいね。職場の仲間は最初、社長は天皇みたいなもんだから、とても発言なんてできない、ビビっちゃう。ところが、やってみると確信になり毎年参加。人間も変わるもんだね。工場長にさえ言えないのにね。

三好　すごい活動力だね。

田中　私の闘いが大きく前進したのは、会社内部からの反撃です。これは決定的、どんなに外が騒ごうとも社内は安定でそよとも動かない。そこで内部から揺さぶろう。各事業所の共産党員に自らの差別是正要求でたちあがること。定年後も年金で死ぬまで差別されるわけ。「これでいいのか、立ち上がってくれ」とオルグした。あっちこっちで立ち上がり、さっき出てきたように、株主総会などへの取り組みなど共に闘ってくれた。そして労働委員会で是正命令を勝ちとり会社を追い込んできた。３３年間もかかってしまったが、なぜ巨大な日立を動かせたかを総じて言えば、「敵の弱点は何かを明確にし、そこを離さずグリグリと攻め続けること」にあったと確信しました。

三好　残業について本人の同意とかはどうなったのか。

田中　ある新聞に、「わが社は今後も残業拒否したからと言って、解雇することはいたしません」と本社がマスコミ人に語った。これで職場復帰にはならなかったが私は納得した。労務政策も変えたから和解に応えた。

三好　大きいね。よく変えたね。

田中　うん、変えた。新聞にはっきり書いてある。裁判・最高裁で負けたけれど、社会運動で会社を譲歩させた、と言えます。　　**（終わり）**